



制作：越木岩だんじり幕制作管理委員会 刺繍：日本刺繍工業株式会社

下絵：芦屋三條地区山村氏所有の幕参照 完成：平成元年9月

牛若丸・弁慶五条の橋の出会い (平成元年新調 見送り幕)

この幕の絵柄は歌にもあるように、有名な五条の橋の牛若丸と弁慶の出逢いを描いたものであるが、ただその左側にもう一人武者が描かれている事によって、この幕が語りかける内容が意味深くなっている。

この武者は梶原景時と言って、源頼朝の一の郎党といわれ、頼朝から信頼され任命された軍監(戦目付)であり、頼朝の代わりに目や耳となつて、頼朝の家人や武将を監視評定する役割を担っている。

であるから、牛若丸と弁慶の出逢いに梶原景時がいること事態、おかしいのであるが、彼がここに居ることによって、義経(幼名を牛若丸)の華やかであるが、はかない一生を全て物語っている事になる。

史実に最も近いであろうと思われる司馬遼太郎の義経の本によると、義経は父義朝、母常磐御前の子で九郎、兄頼朝は母が熱田大宮司藤原季範の娘で母違いの兄弟であり、義経はその後奥州平泉の藤原秀衡のもとで成人し、源頼朝挙兵の報を聞き馳せ参じるが、兄頼朝は義経を弟という特別な待遇は認めず、家人として扱った。

源頼朝は富士川の合戦で、平家にあっけなく勝つてからは、各地の源氏が旗揚げし、いよいよ平家追討の気運が高まってくる。

木曾義仲がまず京都に攻め入ったが、平家の抵抗はほとんどなく、京都の都は簡単に木曾義仲によって落ちてしまった。

もっとも平家は既に都を神戸の福原に移していたから京都には大軍の備えもなく簡単に明け渡したのであろう。その後頼朝軍によって木曾義仲も滅ぼされ、いよいよ平家軍との戦が本格的に開始される事になる。京都に入った頼朝軍の総大将、源範頼が軍議を開いても梶原景時と義経の意見が合わず話がまとまらない。

結局範頼が本体 3000 騎ほどを率いて神戸一の谷の正面から攻め入ることになり、義経はわずか 200 騎ほどで攻撃開始の日時のみを決めて別働隊として攻め入る場所も告げず出発する。これが有名な一の谷ヒヨドリ越の奇襲作戦であり、当時このような戦法はなく、義経が始めて用いた方法で、見事な勝利を得た。

にもかかわらず、梶原景時は義経の功績を認めず、頼朝にも軍功を報告していない。というのも景時と義経は戦の仕方が全く異なり、ことごとく意見が対立していたからである。

しかし京都では義経人気が高まり、特に後白河法王は義経を可愛がり、検非違使左衛門の少尉（京都御所を守る司法警察の長官）に任ぜられ、位も従五位の下大夫判官を賜った。ところが、ここで義経は源氏の棟梁である頼朝の許可を得ずに受けてしまった事が、梶原景時を通じて頼朝との関係をますます悪くしてしまった。

以後、義経は平家追討の総大将となり、屋島の合戦、壇ノ浦の合戦へと、すべて平家の裏をかき勝利を収めるのであるが、景時とは全く意見が合わずますます険悪な間柄になる。

頼朝にとっても平家討滅は最も喜ぶべきことであるのに、義経の武将としての能力にますます末恐ろしさを感じるようになり、義経の働きを認めようとしなかった。

義経にとって平家を滅ぼすことは父義朝の仇討ちができた事で、一応目的を達成したことになるが、頼朝にとっては、これからいよいよ武家による鎌倉幕府を創ろうとする立場であり、このことが義経にはよく理解できず、また後白河法王の魂胆も解らず、有頂天になり、平家の残党に温情的になったり、平家の残党から差し出された娘達に夜とぎをさせたりしたようである。

後白河法王としては頼朝と義経を仲たがいさせて、戦をさせる事によって、武家の力をできるだけ弱めたいねらいがあるが、義経には兄と戦をしようなどという野望もなく、結局義経は頼朝に追われ、最後は奥州平泉の藤原秀衝を頼ってのがれるが、秀衝の死後、衣川の持仏堂で追詰められて自害する事になる。

一方武蔵坊弁慶は義経の郎党として、絶えず義経を助けて、郎党としては優れた働きをするか、悲しいかな、政治眼はなく、優れた参謀には成り得なかった。しかし最後まで義経を守り、全身に弓矢を浴びて、立ち往生したと言われている。

以上、義経は英雄として人気はあったが、時の権力者には疎まれ、短い一生を終えるのである。

この幕の絵柄は梶原景時が入っている事によって、義経と頼朝の関係を、いろいろと見る人に問い掛けているものと思う。

特に言える事は、この絵柄は戦前のだんじり幕としては、比較的ポピュラーな絵柄であり、当時の若者にとって、祭のだんじり運行を、あ・うんの呼吸で一糸乱れず行うことは、非常に感動的であり、人の目に華やかで、一種英雄的気分に成りやすいものである。

このような優秀な若者に対して、義経の二の舞を踏まぬよう、分をわきまえず（自分自身の世の中に対する役割を心得ず）有頂天になり驕る心を戒めた絵柄であるものと思われるが、また、同時に現在の若者にとっても変わることなく重要な教訓でもある。

本書に使用した参考文献

西宮ふるさと民話（西宮市教育委員会）
弘法大師空海（高知新聞社）
六甲山の地理（神戸新聞出版センター）
日本神信仰史の研究（岡田香逸著）
広辞苑（岩波書店）・西宮市史（西宮市）
西宮あれこれ（西宮市）・古事記（主婦と生活社）
越木岩神社栞（越木岩神社）・西宮神社栞（西宮神社）
武庫郡誌（武庫郡教育会）
義経（司馬遼太郎）・社を訪ねて（神戸新聞文化部）